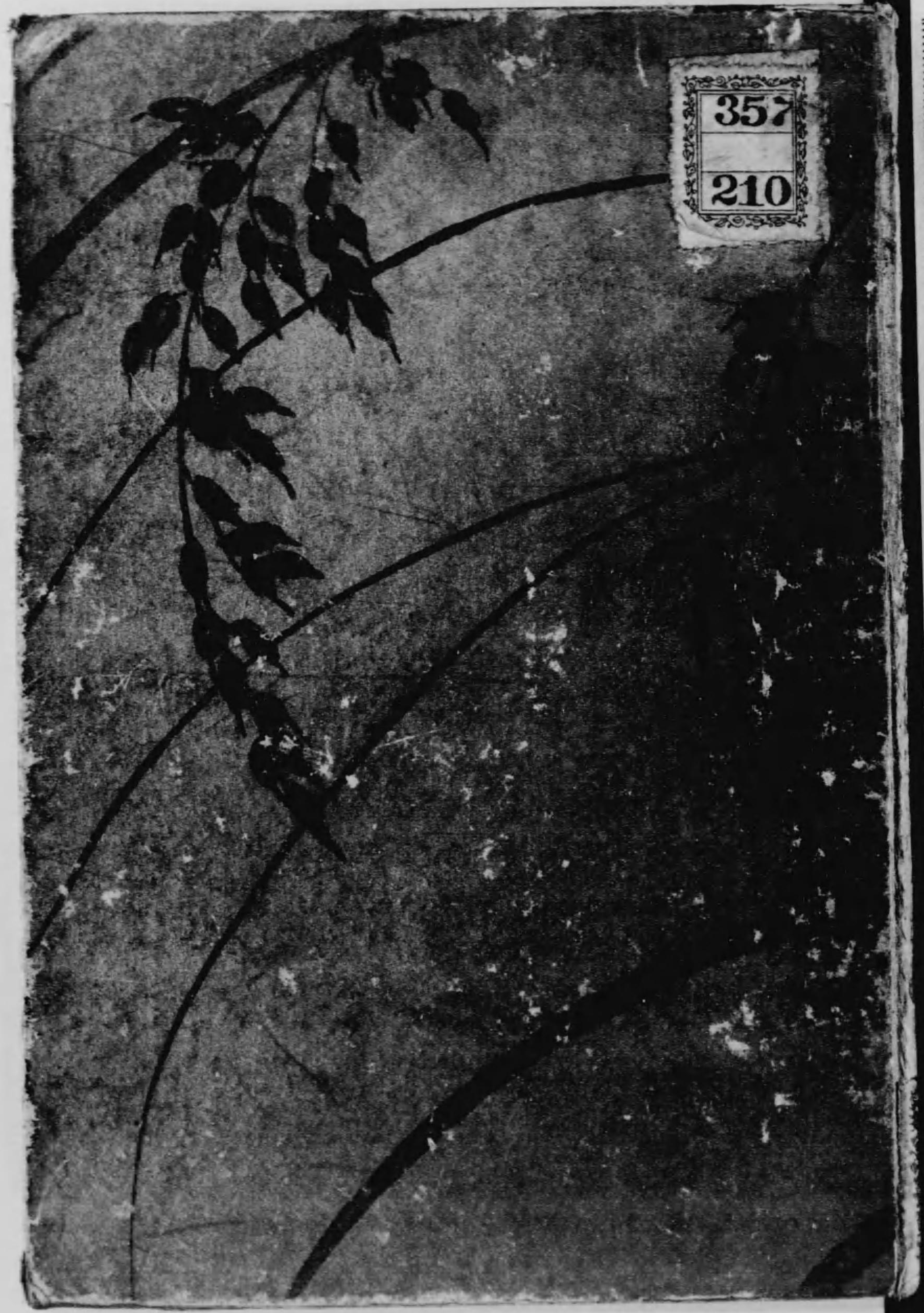


始

無雁集

稲村生之堂

帝國圖書館藏

大正
[illegible].1.9
内交

世途の飜覆常ならざるの間に在りて、三十年來その交を渝えざる故き友の集りて、肝膽相照らす從吾會といふものあり。香池園稻村眞里は實に我が從吾會の同人にして、この垂穗集は香池園の歌集なり。香池園、人と爲り溫恭篤敬、其の共に居るや、芝蘭の室に入るが如し、誠に社中の長者也。夙に皇學に造詣し、現に官幣大社香椎宮に宮司たり。國風を善くして志を諷詠に寄せ、獨り自から之を樂み、章を積んで篇を作し、篇を重ねて帙を

成せども、容易に人に示さゞりしを、同人苦ろに說き勸めて強いて篋裡の秘を發し、鉛槧に附することゝなり、同人角田浩浩歌客、專ら其の編修と校訂とに當りたりしに、今年三月、歌客猝かに館を捐て、其の業半ばにして廢したりしを、同人遲塚麗水代りて復た業を繼ぎ、玆に始めて歌客が遺したる功を就したり。思ふに詩歌は性情の發露、人曷ぞ廋さんや。香池園の歌を誦するに風格穆茂、聲調雅正、常さに其の爲人と相副ふ。國學に造詣

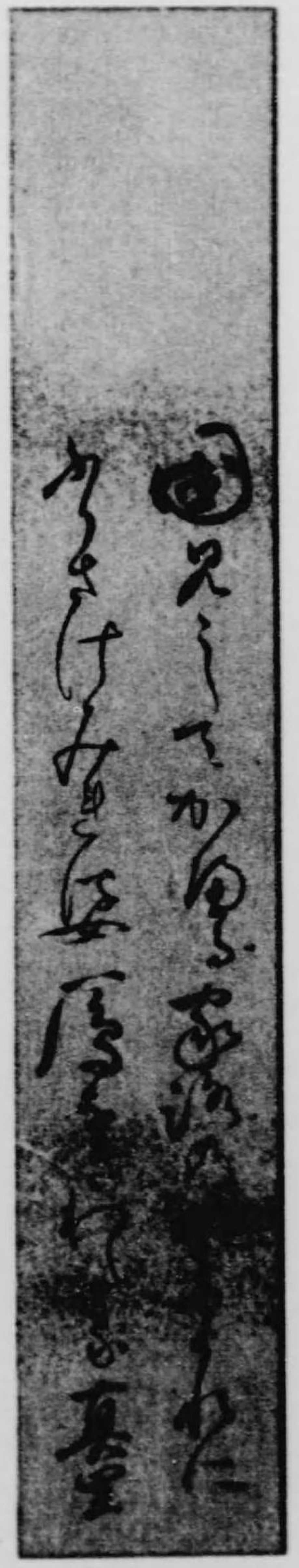
するところ深ければ、新樣古體往くとして可ならざるはなく、采藻の富贍なる、自由に古語を驅役して而も渾然として彫琢の痕を留めず、斐然として章を成すは、誠に水到りて渠成るの妙趣あり。數ある佳き歌の中にて『山陵は花の雲ゐにうづもれて』の歌の如きは、情景双び備はりて無限の含藏あり、誠に吉野懷古の絕唱と謂ふべく、若し夫れ富士の卷の登岳記行八十首の歌に至りては、風格の豪宕なるは斯の山と嵸崢を競ひ、聲調の高遠

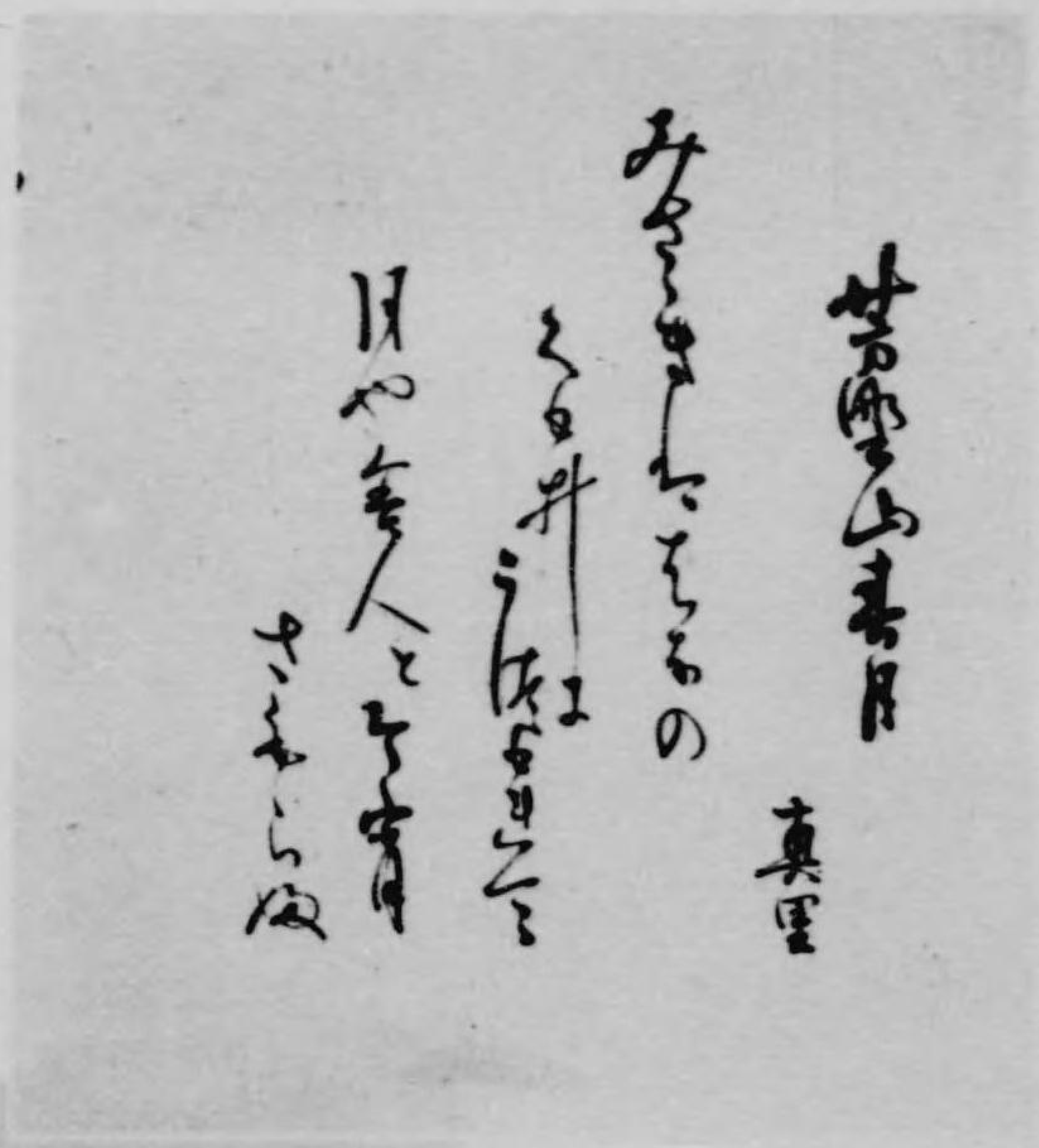
なるは斯の山と崇嚴を爭ふ、竊かに希覯の大作なるを思ふ也。『神の御前』『言靈』は、假に編首の歌の詞に採りて卷を別ちしものにして、歌は强がち其の卷の名には拘泥せず、四季以外の作を收む。中に皇學の闡明と國粹の顯揚とに努めたる歌あるは、素より作者の本領なり。垂穗集の名は、故浩浩歌客の撰するところ、香池園の氏に緣みて、兼て意を謙遜の爲人に寄せたるもの。歌客逝くの後、斯の稿本を閲するに、或は硃に或は墨に、其の自

から校讐補修したる文字あるを見、黯然筆を投じて追哀の念轉々切なるを覺えたり。垂穗集成る。歌客若し重泉の下に知るあらば、定めて應に額を批して歡喜するなるべし。茲に垂穗集を世に公にする由來を記して、以て序に代ふ

大正五年十二月

從吾會同人




芳野山春月
真里

社祝
真里

目次

一 四季の巻 一頁
一 富士の巻 九三
一 神の御前の巻 一二三
一 言たまの巻 一五三

垂穂集

稲村眞里

四季の巻

○新年海　明治三十六年御題

立ちかへる年のあけぼののどやかに青海原は
浪風もなし

海原の浪の光も寄りそひて御代ののどかなる年
のはしめか

門松の松の樹のまに見ゆるかな御代しづかな
る遠つうなばら

○明治四十一年御題「社頭松」を詠める

すめらみことの大御代を
無窮に護ります皇神の
齋垣に立てる老松の
ふたばの昔ぞなつかしき

いつの御代にか根ざしゝて
千度霜おく冬を經て
み空を翔るみづちなす
かゝる姿に茂りけむ

旅行く人も蔭とめて
御前をろがみ世を祈り
しばしとてこそ幾度か
照る日をさへて憩ひけむ

將軍の事竟へて
歸り來まして詣づとて
下りてつなぎし黒駒の
嘶えし聲しも今はなし

心なき友さそひ來て

いくたび枝にのぼりつゝ
ゆら／＼搖りしうなゐ子も
今は頭に雪降れり

をみなわらはのうちつどひ
蜒蜿ふ幹にならび居て
草のひゝなを押し並めて
春日たのしく遊びつゝ

その人その物つかのまも
そのおもかげを留めぬを

老ゆとしもなき松が枝の
いつか老ゆれどとこしへに

いよ／＼茂る其の影は
みどり變らぬ眞ごゝろに
君が八千代や禱るらむ
君が八千代をいのるらむ

〇雪中松　明治四十二年御題

白妙に雪降りけりなわがやどのみさをに高き
松のこずゑに

御垣内に奉すよしもが布島の磯馴の松にあわ
雪の降る

○新年雪　明治四十三年御題

立つ年にゆきふりけりな九重の大内山は玉や
しくらむ

大御代の大豐御代の豐御代の年立つ今朝の雪
のおもしろ

○寒月照梅花　明治四十四年御題

梅の花來てふに似たるこよひしもこほれる月
のかげの照り添ふ

月かげは凍りにけらしわが宿の花さきにほふ
梅のこずゑに

清けなるちぎりなりけり霜さゆるこよひの月
に梅のさきたる

○松上鶴　明治四十五年御題

雲ゐ飛ぶつばさをさめて常磐なる松が枝のど

にすめるたづかな

○新　年　祝

ゆたかにかへる新年（にひとし）の
年のよごとの祝言（ほぎこと）を
幾千代かけて壽ぎふるす
御代のさまこそあらたなれ

○

老人はおいをも忘れうなゐこは御代をも知ら
でいはふにひとし

○

岸邊には花も柳もねぶるなり利根の河原は霞
のみして

○

花の色は霞ながらにほの見えてみなかみ遠く
立つ霞かな

○

ほの〴〵とかすむ曙とよもして愛鷹山（あしたかやま）に雉子（きゞす）

鳴くなり

○

花も散り鳥も鳴くなる夕ぐれにさし出づる月
もかすみはてにけり

○霞

うねび山わが立ち見れば山もとゆ大和國原か
すみたなびく

むらきもの心のどかに今朝見れば遠山眉ぞか

すみこめたる

足ひきの山もと遠くかすむなり花さく里の春
のあけぼの

○浦　霞　三月廿九日玉鉾會献詠

あめ地に春滿ちぬらし浦安の國の八十浦霞わ
たれり

○

朝日子の影うら／＼とさしのぼるひむがし山

に霞たなびく

○

天地（あめつち）をのどけく春になすものはゆふべたなび
く霞なりけり

○

うなばらはかすみにけりな菅の根の永き春日
に目もはる〴〵と

○

朝霞雨とけぶりてみよし野の山おぼろげに咲
ける花かも

○

月はもよよすがら花にあくがれて曉寒く影ぞ
ねぶれる

○

月も花もねぶるばかりにかすみけり鳥も鳴き
なむ春のあけぼの

○

訪ふ人も無き山里の春の夜の花櫻戸に月ぞか
すめる

○

おぼろ／＼かすめる月にあくがれて花さく里
にわれは來にけり

○

ふじのねの影ぞかすめる菫さく田方(たがた)の杜(もり)の春

のあけぼの

○

薄霞さながら雪に色添へて富士の高根は春に
なりぬる

○

月影をおのが梢にのこしおきて風なき夜はに
花の散るらむ

○

風をこそさそふものとは思ひしか月にも花の
散る夜なりけり

○

花ふゝきそらに吹きまく風やみてゆうべしづ
かに春雨のふる

○

おぼろ〳〵かすみはてたる春の夜の月をかす
めてあわゆきぞ降る

○

今日も降る雨のしつくにしほたれて花なき里
に鶯のなく

○

ゆふ月をやどす吉野の花の奥はいりあひの鐘
もかひなかりけり

○

山陵（みさゝぎ）は花の雲ゐにうづもれて月や舎人（とねり）と今宵（こよひ）
さもらふ

○

貝拾ふをとめの裳すそさら〳〵にさゝら波寄
せ春風の吹く

○静浦にて

わが家の園の姫松たけのびぬ不盡の遠山かげ
や隠れむ

○若き母

一春まだ淺ききのふけふ

見るめともしき此の里も
霞やう〳〵立そめて
谷の梢に鳥鳴けり

二何のさちぞもうら安の
御世とこしへに治りて
いぬるに戸をもさしやらず
晝は犬こそ門まもれ

三八束の稲穂とりいるゝ
やがて大方貢出し

粟稗やゝに一歳を
支へしものをいにしへは

四、或はしげ／＼つかさ人
あるか無きかをはたりつゝ
辛き目をさへ見せてしは
昔がたりに聞くのみぞ

五、されど今はた居ながらに
細き烟もえは立てず
蠶をも飼はねばいかにして

親にきぬをもさゝげまし

六、朝は夫と耕して
ゆふべは子等と縄なひて
昨日とおくり今日と過ぎ
明日さへ暇もあらじをや

七、去年の犢もたけのびて
力も親に似てなりぬ
其の牛牽きてわが夫は
星の光に出でにしを

八、風も吹かねば立田山
沖つ白波知らざらむ
憂き世のさがもうつせみの
はかなき事もいさゝかも

九、されど野路には露おきて
山わけ衣濡れやせぬ
風もさすがに寒からむ
雲雀鳴くにもおもふらむ

十、君とはぐゝむ此の愛兒

衣さむみと泣くなるを
君は遠くも聽くらむか
吾が家のかたや顧みる

十一、苗代小田の引板の繩
やがて幾すぢとゝのへむ
このめもはるの時知りて
雨にめぐむもほどあらじ

十二、桑こきたれて蠶をかひて
繭をとり得て絲うみて

吾兒が晴衣も今年こそ
ひとつは手にて縫はましを

十三、あはれ稚子よ寢ねよかし
今ひとゝきをいねよかし
母は起き出て水汲まむ
覺めばさめてよ背に負はむ

十四、膚に負はれてわが背より
此の世のさまをながめよや
いでやな泣きそいで吾兒よ

憂さもつらさもなきものを

○すみれ

心ゆくへの旅路には
夢をつれなく隔つなる
關の關守あだにして
月日はたゞにいなづまや

ゆかしう咲ける紅梅を
きのふみ雪に賞でつるを
こゝは既くも東風吹きて

今ぞ櫻の世となれる
上野　淺草　向島
心ひかるゝかた多み
昨日も今日もおのづから
あくがれ出づる春の空

書(ふみ)をひらけば文字は花
夢には散らふ花吹雪
嵐の山も芳野も
さながらたどる心地して

春日(はるび)のどかに舞ひ暮す
胡蝶のつばさ借りもちて
吾が魂(たま)ひとりさまよひぬ
花より花に醉ひしれて

雲に霞に咲きみだる
千代田大城の斯のけしき
いかにしせばか父母に
看せまゐらせんかくながら
繪かく筆こそわがもたね

袖に包まむすべはなし
吾(あ)をは必おぼし出でむ
あはれ故郷なつかしや

夢と夢とをいつにだに
こなたかなたに相かへて
思ふまに／＼おもふかた
見てましかばとねがひつる
おもひははやもかなひてか
雁(かり)だにかへるこのゆふべ

かへしの御ふみ賜りぬ
み空こひしきかなたより
あとなつかしき水茎の
にほひの奥にまきこめて
都の花のかへしにと
ひともと菫(すみれ)花たまはりぬ

うからはらからたらちねの
幸(さき)くますらむおもかげも
浮びぞあらそふ壺すみれ

たゞひともとのこのすみれ
都の春はまぼろしか
繙く書の文字のはな
散りかふ夢の花ふゞき
消えて空にはほとゝぎす

○柳

影うつす池のおもさへうち煙り園の青柳春雨
の降る

○門の柳

あしたには
さ霧にけぶり
ゆふべには
霞たなびき
萌えまさる
吾家の柳
をちかたゆ
見ればなつかし
あしたゆふべに

○

なつかしく春こそなびけ吾が門の柳の絲の風
にまかせて

白鳥の飛び行くかたをうち見れば一むら柳か
げぞけぶれる

○餘寒

うち見れば遠山かすむしかすがにきのふもけ
ふも寒くぞありける

葛城の遠山ほのにかすめるをいつまで寒き春
にかあるらむ

うちかすむをちの遠山けさはまたさすがに寒
きすがたなりけり

咲き出づる梅の花さへ寒からむまた冴えかへ
る今日の寒さに

○

消えがてにいさよふ月のあけぼのゝ霞の中に
花ぞ散りける

○春　雨　小杉博士の一年祭に

山櫻にほふ空さへかきくれてうらさびしくも
春雨のふる

○月夜に花散る

照る月に梢離れて散る見れば花はこよひぞ盛
なりける

○朝　花　玉鉾會献詠

朝霞たなびく野路にあふぐかな高嶺ににほふ
花のしら雲

○

立ちわたる白雲なびけむかつをの八重咲きを
ゝる花の白雲

○

うらゝかににほふ色をばかすませておぼろ月
夜に花を看るかな

○水　邊　花

あふみの海春のあけぼの見わたせば滋賀(しが)の辛
崎花ぞかすめる

山櫻花さきをゝり布留川の川音清し花さきを
ゝり

立ちよりてむすぶみ山の眞清水にふたひら三
ひらちる櫻かな

○春　月

咲きみだる花のにほひも添ひぬらしみ空の月
の影のかすめる

○都　春　月

柳櫻それとも見せず玉しきの都大路にかすむ
月かな

○

花ちらふゆふべそゞろに見わたせば遠山がす
み月ぞ昇れる

○

おぼろ〳〵花にいさよふ月かげは大空わたる
ものとしもなし

○春　望

鶯もやゝなきそめて
梨の花もほころび出でゝ
きのふけふ野邊はる〳〵に
立ちわたる霞のけはひ
のどけくなりぬ

○春　曉

春がすみ消(け)なば消ぬべく
白雲の絶えば絶ゆがに

夢うつゝまよふ曙
わが宿のむら竹の邊に
わが園の梢の花に
あさな〳〵來鳴く鶯
常世にもがも

短　歌

曙の夢なる人をおとづれて
鶯鳴くも夢(ゆめ)のあけぼの
やゝ〳〵にうつゝに歸る曉の

夢路のどかに鶯の鳴く

○

をちかたの山もかすみてうら／＼とのどけき
春に鶯のなく

○

花さそふ夕暮の風のしづけきに鳴く鶯のこゑ
ぞきこゆる

○燕

雲に舞ひ風にたはるゝつばくらめ心かろしと
人や見るらむ

○

春風のさそふまに／＼散りみだる花の吹雪に
飛ぶつばめかな

○

今更に家路は遠し春の野の花のしとねに蝶も
寝なゝむ

○東光寺を訪れつるに住持城行安師あら
すしばらくやすらひてよめる、時は明治
三十九年にかありけむ

散る花もそよ吹く風ものどかにてあるじがほにも人をとゞむる

○

月花も思ひわすれつうちわたす五百重（いほへ）春山（はるやま）霞たなびく

○

霞たつ空に雲雀をうたはせてすみれ咲く野ぞ子らはしめたる

○若　草

さを鹿の鳴く聲聽きし春日野の野邊の若草萠えそめにけり

○三月の末つかた女生徒どもを率て一日遠足して三輪山の下をとほりたるとき

たわやめが菫摘み行く三輪山の山もとのどにうぐひすの鳴く

○小松をゑがける扇に

春がすみたなびきわたる小松原鶴も住むべきところなりけり

○葛城山の雪を見て

天そゝる葛城山(かつらぎやま)を
はろ〴〵にふりさけ見れば
宵の間に降れるみ雪に
今朝はしも霞たなびく
うちかすむその高山の
降りおけるその白雪(しらゆき)の
言ひも得ず名づけも知らぬ
久方のそらのにほひに
朝つく日豊さかのぼる

影のさしたる

短歌

大空に浮びて見ゆる葛城の
嶺の白雪光ありけり

○四月の初つかた

きのふしもみ雪降り敷き
今日はしも霞たばしる
宵の根の長き春日と
かつ〳〵も咲きたる花の

にほひはもおはれ

短　歌

時は今春になりぬとわが宿の
櫻の花も咲きつるものを
咲く花に霞たばしるこの秋の
御としまさきく神ちはひませ

○春日社頭海

入日あらふ夕波なぎて淡路島(あはぢしま)かすみこめたり
淡路島山

大神の知らす海原風なぎて海幸(うみさち)多(さは)に舟漕ぎかへる

○

明けわたる大海(おほわた)の原(はら)に眞帆あげて舳(へ)艫(とも)聯並(つらな)み船の行く見ゆ

○

みづ枝さす樹の間に殘る遲櫻とぶらひかほに胡蝶舞ふなり

○

うちかすむ大川の邊の若草の水際に馴れて駒
ぞいばゆる

○古の鳥飼の里に友を訪れて

鳥かひの御牧のまきのはなれ駒この世はなれ
て今日はくらしつ

○山　吹

まし水をむすぶ岩かげ見上ぐればみねの山吹
ゑまをゝりつゝ

つれ〴〵と雨ふりくらす庭のおもにおのづか
ら散る山吹の花

○牡　丹

はつか草まさかりにほふ姿見れば花を花とは
なれをこそおもへ

去年さきし深見草あはれあはれわが培ひ足ら
ぬ深見草あはれ

○若　葉

咲きほこる花のいろ〳〵
しかすがにうつろひぬれば
若草はうちわたす野邊
しなやかに風になびかひ
みづ枝さへ五百重のみ山
なごやかにうらなつかしも
あはれ〳〵國うら安の
うら安くうるはしみせな
空そみの世人

○橘

わか葉しげる窓にすゞ風待ちをれば花橘のそゞろかをれる

○川狩

春過ぎて夏黄瀬川の清き瀬にさばしる鮎子釣るは誰が子ぞ

○

あを葉しげる神路の山の木のもとに五十鈴の川の川の音きこゆ

○

おほかたのあたなる花はうつろひて野にも山にもわか葉しげれり

みつえさすそのみづ山をうらわかみとはに見かほしそのみづ山を

○郭　公

をりからに聽きはなれても郭公大城の夜はの聲ぞ悲しき

○郭　公　六月五日玉鉾會四大人の御祭に獻詠

あたに匂ふ花の色散りて今宵きけば山郭公聲えぞよろしき

○

行けば〳〵五百重白雲立ち迷ふ函根の山路ほとゝぎす鳴く

○

夏山のみどり樹深く漏る月のさすがに艶にかげのきらめく

石橋山懐古

榮華の夢をうつゝぞと
思ふ平氏は夜晝に
取りあつめたる月花の
みやびあそびに暇なく
醉ひつうかれつ時はしも
治承四年の秋のすゑ
蛭が小島のにごり江に
潜める蛟龍たちまちに
閃きわたる石橋山

峯にもをにも夕風に
昔ゆかしき白旗は
吹きぞなびくる關八州
いはほを碎きて寄る波に
八ツ目鏑のひゞきさへ
みだれ〳〵て夕まぐれ
敵も身かたも見わかぬに
古巣にかへる鷲の
白葦毛なる若駒は
勇むあるじをけざやかに
のせて送るか死出の山

鹿待つ谷にたぬき獲て
思ふまゝなる山幸と
膝の下には組み敷けど
まだ出でやらぬ月影を
待ちもだえて雲透に
見やる刄のうらみこそ

千歳五百歳鞘まきの
くりかたかけて鞘ながら
治まる御代の今年今日
むかししのびて吾が訪へば
をりしもそゝぐ五月雨に

語らじがほの口なしの
花は露けく匂ひつゝ
低くさまよふむら雲に
鎌倉眞鶴安房の山
姿をさめて海くらし

○梅　雨

さみだれは降らばふらなむ敷島のやまと島根
はさ苗とる頃

朝ゆふにむかふみ山も影かへてみどりぞけぶ
るさみだれの頃

めづらしく來し郭公聲たえてきのふも今日も
さみだれのふる

さみだれの降るゆふべしもつく〴〵と世のう
きことを思ひ出でつゝ

吾がめづる池のあやめのあやなくも物をこそ
おもへさみだれのころ

駿河なる浮島沼の植ゑし田は浮きや流れむさ
みだれの頃

○雨中早苗

ほしあへぬ田子が蓑しろさみだれに今日もぬ
れつゝ早苗とるらむ

○

佐土原やよべばこたへむをちかたの君住むか
たに鳴くほとゝぎす

〇新　樹

木がらしの聲をさびしくおもひつるくぬ木榛(はり)
原(はら)わか葉しげれり

〇窓　竹

咲く花は時の間に散り
いつしかも夏にしなれば
いとゝしもさびしき吾家(わぎへ)の
窓の邊に生ふるわか竹
あしたには鳥も來鳴き

ゆふべには月もやどりて
そよと吹く風もさやけく
うちけぶる雨もなつかし
うべな〳〵心の友と
とこしへに對(むか)へどあかぬ
此の君のかげ

〇又

蔭しげる窓のくれ竹見れどあかぬかも
うつろはぬ千代の緑の花にまさりて

○若竹

昨日しも　三尺たけのび
今朝見れば　二重衣ぬぎ
すく／＼と　日々におひ立つ
吾が窓の　若竹の子の
三もと増し　五もとましつゝ
葉末には　白露やどし
節毎に　玉をつらぬく
その竹の　姿さや／＼
蔭のさや／＼

○又

み空しのぐとおもふまで
すく／＼延ぶる竹の子の
いつかさ枝も茂りあひて
雨にも風にもさやぎつゝ

○杉

玉垣の神つ老杉さみだれに緑いよ／＼わか緑
せり

○夕立

あやしくも雲過ぎ行きぬ石上(いそのかみ)布留の神山夕立のして

吾がせこがゆくへ遙に見おくれば雷(かみ)さへ鳴りて夕立すらし

石上(いそのかみ)わが住む里は雲に入りて大和國原夕立のする

くるしくもあへる夕立行きすぎてかへり見すれば月ぞのぼれる

○夏月

たぎつ瀬に鳴くなるかはづ聲そへてこよひすゞしき月の影かな

杉むらのしみさび立てる夏の夜の月影すゞし布留の山もと

○蓮

曉の空もにほひて風渡るはちすの花の露のこ
ぼるゝ

○

涼風に吾が立ち行けばひんがしの小松松原朝
日昇れり

○夏の月

病みて臥(こや)して靜けくも
眠りています御枕邊
呼べどこたへもなつの月

さびしく照す此の夜ごろ
今は物をも見たまはず
今はわれをも呼びまさず
あはれ母上かくてだに
世にはおはせよいつまでも

○

秋立てば衣手すゞし住吉(すみのえ)の松の樹の間のそゞ
ろありきに

○女郎花

をみなへしそのいろ香さへ姿さへ名さへなつ
かし秋の野にして

○薄

道の邊の石の御ほとけ肩こえてしげれるすゝ
き秋風ぞふく

子らが植ゑし一むらすゝきふさはしく吾が門
の邊にしげりあひにけり

しのゝめの野風涼しく乗る駒もなびく芒にき
ほひてぞ行く

すゝき原靡くを見れば朝風を色あるものとお
もひけるかな

○紅葉

みのを山とはにとゞろく白瀧のかざす紅葉に
夕日のこれり

空高く仰ぐみ山も燃ゆばかりみのをの秋の色
ぞかゞよふ

山かつが鎌をのがれし櫨もみぢおく露霜に散らずもあらなむ

ゆられ行く山籠おりて手すさびに折らむとすれば紅葉散りつゝ

しぐれする箱根の山路わが行けば駒のたつかみ紅葉散りかふ

鳴きわたる雁(かり)のなみだも色そへてしぐれの宿のもみぢ染めつゝ

名も知らぬ鳥の一聲鳴き添ひて苔むす庭に散る紅葉かな

○友へのふみに庭の紅葉一ひら添へて

君をおもふ心のいろのうすくあらば庭のもみぢばかくも染めみや

○秋　風

しづ鞍に紅葉折り添へさつをらが歸る野ずゑに秋の風吹く

影やどす月の光もさびしくて御濠の淺茅秋風
そ吹く

○雁

國見して歸る家路のゆふぐれにふりさけ見れ
ば雁なきわたる

さやかなる秋のゆふ暮聲立てゝ御空なゝめに
雁鳴きわたる

ほがら〳〵昇る月影うち羽ぶき東のそらを雁
鳴きわたる

かしこきや世の憂き事を鳴きつれて千代田の
御濠雁すだくらむ

○しぐれ

をり〳〵は芭蕉の葉さへ音なひてゆふべさび
しきむらしぐれかな

○遲塚麗水の訪れ來たるに、あらで、
後よみておくれる

訪はれきときけばいとこそさびしけれ秋のし
ぐれのたそがれの庵

○月

咲きみだる尾花くず花かげ漏りて月こそのぼ
れ武蔵野のはら

あくがれて月の心になりぬなりいづくをたど
るこよひなるらむ

おもほえず君に逢ふかな忍が岡月の光もなさ
けありけり

○

空は高くもすめるかな
風も涼しく渡るかな
あくがれ出でしこのゆふべ
月のみやこやおとづれむ

○仲秋無月

雨となる月の心はおもはずてこよひ歌よむ友
はつどへり

○露

うちわたす野べの白露はの〳〵と天地のどに
朝日にほへり

さやけしな露のあけぼのうちわたす千町の稲
田風もそよがす

朝日子のあけぼのにほふ影きよし千里の稲田
露をやどして

うべしこそ君の恩をたとへけれ野にも山にも
おきあまる露

○秋の初つかた和泉なる櫻井神
社にこもりて

垣に夜すがら秋を鳴く蟲の聲きくからに夢
もさやけし

○秋　夕

夢と見つるは夢ならで
うつゝぞやがて夢ならむ

十歳七歳ひたすらに
過ぎしむかしもおもしろし
木の葉散りかふ秋の暮
村雨そゝぐ此のゆふべ
友をむかへてかたらへば
酒もあるじの心酌む

○擣　衣

うちしきるきぬたの音に月澄みて秋風さむし
富士の裾原

○槇逸翁が俳句「寝せた子に氣がねしてうつきぬたかな」といふを

寝ぬる子に心おきつゝしかすがにせなが衣や
急ぎうつらむ

○殘　菊

露霜の深くなれゝば垣もとの殘る白菊いよゝ
なつかし

○矢　口

散りのころ堤の柳秋ふけて矢口の渡ゆふ風ぞ吹く

〇社頭月

月見れば月の光もすさましな荒れまさり行く姫許曽の森

〇九月十九日夜

月の色風のおとにも立ちかへりはかなく家をおもふ此の頃

〇古陵暮秋

樹立さへあらはになりていそのかみふるき奥つ城秋ふけにけり

〇

片岡の夕陽丘は散りそめて秋もやう〳〵暮れむとすらむ

〇槻

向つ峡の五百枝大槻散りそむる黄葉の秋を看る人ぞなき

夕されば吹くとしもなき秋風に岡の大槻散り
そめにけり

わがやどの里の大槻いにしへに田鶴むら來鳴
き三日住みきとふ

天をおほふ五百枝並槻散りそむる樹のしたみ
ちをわが今日も行く

○落　葉

もみぢ葉の散るにまかせてわがやどはいよゝ
寂しくなりまさりつゝ

吾妹兒が朝ぎよめする庭のおもに櫻のもみぢ
散りそめにけり

○こゝちわつらひてうかれありきせる頃伊豆の戸田港なる御濱といふ岬にしばしやどりせり、その頃よめる

御濱には秋ぞ早くもふけぬめる物思ふ人のや
どりせしより

蟲は鳴き波はさわぎてよもすがら御濱の海人
は夢も結ばず

空渡る雁も涙をそゝげかし御濱の月に泣く人
もあり

なか〳〵に沖行く舟のうらやまし追はるゝ風
は乘る風にして

千鳥鳴く御濱の夜はの荒磯にひとりぞ物思ふ
月もあらなくに

遠つあふみ空うつ浪の灘すぎて駿河の海をく
ぢら行く見ゆ

○

しぐれをも心あるものと見つゝをれば吾が松
のとに霰降り來ぬ

むらしぐれまたひとしきり降り來なりこよひ
さびしき月のとぼそに

しぐれ降りしぐれ晴れゆく今宵しもさびしき
月のかげぞいさよふ

ひとしきりしぐれの雨の過ぎ行けば野さへ山
さへもみづるものを

○

紅葉散り霜おきまさる此の夜ごろ月のかげさ
へ寒くなり行く

○霜

いそのかみ布留の神山ほの〴〵とあかつきが
たに霜ぞさえたる

散りかゝる庭の柳に照る月のひかりにさゆる
夜はの霜かな

○寒月

寒きいづみたゝひみちぬとおもふまでさえた
るそらにさゆる月かな

吹きすさぶ不二(ふじ)のねおろしはげしきに月は高
根の上にすみつゝ

○雪

おもしろく降るみゆきかな踏みわけて人や訪ひ來む酒あたゝめよ

今朝見れば富士の高嶺とひとつらにみ雪つもれり庭の松が枝

千代こめてみさをゆかしきくれ竹のひとむらたわに雪は降りつゝ

筥崎の千代の松原降る雪にまぎるゝ千代のかげもなつかし

○霞

劒太刀さやをはらひて手すさびに吾が看るゆふべ霞ふるなり

見らくよく音さへ清き玉あられ田畑あらさぬほどに降らなむ

○千鳥

川風はをさまりはてゝ霜けぶる月もさむけく千鳥啼くなり

○埋　火

さるからにさぞとも言はぬ埋火(うづみび)は冬のよひ〳〵
わが友にして

○歳　暮

ひとゝせを今年もいめになしはてゝ空しくな
げく年のくれかな

いそのかみふるの川水さら〳〵に流れて年は
くれにけるかな

○歳　晩

世を見渡せばうれたしも
身をかへればはつかしな
ふり分髪をくらべ來(こ)し
をさな友どちいかならむ
心のおくかかたらひし
益荒をのこも何すらむ
緑さかゆるときは樹の
かげのみひとりかぐはしく
書讀む窓のともし火は

光うすれて身にせまる
今年も今や晩れなむを
わが道いつかむくゆべき
啼きつれわたる雁がねの
涙か雨のふりそゝぐ

富士の卷

○登嶽紀行

不盡山に登るとて御殿場なる友がりおとづれて、そこより箱根なる姥子の湯にゆあみせり。途に、をとめ峠にて

雲ゐ高くわれもぞ來しと見かへれば不盡のみ
山は大空にあり

姫神のゑまゆにほひてうるはしく立たすや不盡の常夏（とこなつ）の山

不盡のねに登るみそぎと玉くしげ箱根の出湯ゆあみつるかも

姥子に湯あみしてその日御殿に歸りて中一日休らひて次の日朝まだき里の馬やとひて合力といふもの一人つれて出で立つ

たどり行く駒のたつ髪風吹きて亂るゝ野邊に秋の花さく

二合目といふあたりにて馬を返せり

八百歳の樅（もみ）の林の樹ぶかきにいばゆる駒やわが乗りすてし

さて小石の山路たどり行く

眞直にも行かは行くべきみ山路をつゞらをりにもわがくねり行く

忽ちに雲霧往來す

しばらくはさ霧の海にたゝずみて山を山ともおもほえなくに

雲いぶき速雨過ぎてつかの間にみ山隠りて影
もとゞめず

水分の神もいそはく今日ならむ風吹くかたに
雨の降り行く

ますらをが裳の裾ぬらし吹きすぐるあらしの
末に飛ぶさゝれかな

　　全山缺けそこなはれて今や崩えぬ
　べきさまなり

岩も裂け谷も潰えてや落ちぬべき危き不盡の
山の姿や

　　箱根の山を見かへるに葦湖一むすび
　の水ばかりに見ゆ

函根山清きはちすの葉の上の玉の清水や葦の
みづうみ

　　風止みたり

しなとべの神も御杖にいこふらむ雨もさ霧も
今はおひ來ず

雲飛び怪しき山のかたちあらはる

雲も飛び虹もちぎれてたゞならぬ雲の變化（へんげ）を眼の前に看つ

山の上の空にたゞよふ白雲にうつりて奇（く）し不盡の神山

湧き立ちていさよふ雲にうるはしく動かぬ山の影のうつらふ

山の上の空に湧き立つ雲の峯にあらはるゝ影か不盡の大山

雲のむた山の影ゆらぐ不盡の嶺の夕日さす影雲のむたゆらぐ

湧き立ちてうち仰ぐ雲にあらはるゝ不盡の高嶺は影ゆるぎ出づ

大空の雲井にゐがく不盡の嶺はいづれの神のすさびなるらむ

天地に心おどろく雲にうつる不盡の嶺の影は
名づけも知らに

その形見るよしもなき山の上にうるはしき影
を仰ぐたふとさ

吾が身さへ其の雲に入らむ世を離りかき消つ
影をとこしへにして

潰えぬべく思ひし山をうるはしくさながら雲
にうち仰ぐかな

八合目わたりにか、千代の白雪あり

みな月の其の望の夜に降る雪の千歳の雪の清
き雪かも

吾が心色に肖えなむ不盡の嶺は千五百長秋み
雪さやけし

夕ぐれ辛うじて山のいたゞきに登
れり

登りはてゝかへり見すれば風もなぎぬ雲のね
ぐらやいづくなるらむ

空にのみ仰ぎし不盡の神山に登りてけりな心
足らひて

天の下國は見ゆれどうちよするするがの國は
心行く國

伊豆の海海邊(うなび)たどりて目に覓(ま)げば雲見が崎も
霞こめたり

伊豆の海や國のはてしもうち見れば小(さ)き大島
烟(けぶり)立つ見ゆ

天さかるをちに見し山甲斐の山雲のそきへに
横をりふせり

甲斐にもあり駿河にもありとふ不盡の嶺は照
る日の本の國中にあり

見さくればうまし國々見のまゝに爭ひ寄り來(く)
不盡の神山

天の下の五百重(いほへ)の山のうまし山の並(な)み立てる
山は見れどあかぬかも

日は暮れぬ

しづけしといふもなか〱雲の上の不盡の高
嶺に月かゞやけり

高山の月影清みうつそみの此の世の事もわが
おもはなく

かくばかり靜けきよひや天つ神國御神も神つ
どひます

天地の初發(はじめ)おもひて不盡の嶺にたゝずむ宵(よひ)し
月ぞいさよふ

天地のはしめおもほゆさえわたる不盡の高嶺
のさ夜中にして

不盡のねはこの世の外に高ければ月の光もこ
とにしありけり

雲の上の不盡の高嶺におし照りて名づけも知
らぬ月の影かも

國原をさ霧にこめてひさかたの月は高嶺の上にさやけし

むら肝の心照してさ夜中と不盡の高ねに月の冴えゆく

夜ふけて室の外に出づれば岩角に居て笛吹くをのこあり

霜さゆる高嶺の夏のさ夜中に月に笛吹くみやびをもあり

をちかたは八重白雲に月照りて壁立つ限海かとぞ見る

高ねはも空しきそらに拔け出でゝ月は吾が手に取らば取りてむ

天そゝる不盡の神山月清し此の世の外の夜のしつけきに

をり〳〵にうち出でゝ見れば夜もすがらさやけき空に月ぞさえたる

あかつきに室を出づ

八十國のそき立つ限見はるかし吾は富士の嶺のしののめにあり

四方八方に國のそき立つ限見ゆ不盡の高嶺のいただきにして

國のほの八十國原にあらはれて不盡の高嶺ぞ空をしのげる

見はるかす國のそきへに雲消えて衣手寒し嶺の朝風

よひに見し遠つ海原國原をしのゝめの空に見るがともしさ

さし昇る朝日よそへて大君の大宮わたりをろがみまつる

かしこきや吾妻國原たゞならずかすむわたりや大宮處

見おろせばみ山の裾のさくなだりは山しげ山
ひろり繁れり

不盡のねのふもとはろ〴〵うちひろる千里廣
野の若緑かも

劒ケ峰の頂に登れば山の大いなる影駿
河の西の國原にあさやかにうつれり

朝日子の光たゞさし不盡のねの嶺のかげこそ
國原をおほへ

つらなみて服從(まつろ)ひ立つる甲斐がねも信濃の山
も見るにさやけし

甲斐の國の方に許多の湖見ゆ

不盡の嶺のふもとめぐりて鏡なすさやけき湖
は見れどあかぬかも

富士川もたゞ白き糸の如く見ゆ

ふじ川のたぎつ水上(みなかみ)遠白くほのにももよひ雲
に入る見ゆ

わが故郷も脚の下にあれどよくは
見えず
ふりさけて見れども見えず朝霧はしばしなび
かへ故郷のそら

蒼蛟ゆたに噞喁ふ駿河なる三保の松ばら波に
うかびて

山の頂に淺間の大神鎮り坐せり
花の神櫻大刀自のとこしへにうしはきい坐す
不盡の神山

神の代の裝つくして木の花の咲耶姫こそたふ
とくありけれ

とこしへに櫻咲き散る我が國は櫻大刀自の神
しい坐せば

山路を下る路にして淺間神社宮司
高山昇ぬしに逢ふ

音にのみ聞きわたりつる君に今日神のみ山に
あふがうれしさ

神ながらかしこき山路けふはたゞ君によそりて禍なく下りぬ

大宮に下りて浩々歌客の家にやどる

うるはしきみ山くだりてうるはしき友がり訪へば心足らひぬ

官幣大社淺間神社にまうづ

木の花の神の宮居ゆ仰ぎ見れば空にうるはしき富士の山かも

木の花の神の宮居に湧き出づる御池の水は眞玉しら玉

瀧つ瀬に白絲かゝり富士川に眞玉流れて不盡のねたふと

天地は遠くくれゆく夕しも不盡の高嶺にわが立ちつくす

大宮なる浩々歌客の家を辭して靜浦のゆかりの家なる常磐やを訪ふ

此處もまたわれをもてなす郷ならむ浦のある
じは不盡の嶺にして

いくかしも語らば盡きむ不盡の嶺のたへにく
すしき嶺のけしきを

　　靜浦に一日やどりてさて後に故郷
　　に歸りぬ

ふるさとに歸りて見れば天そゝる不盡の神山
なつかしきかも

とことはにおもひ離れじ不盡のねの大きうる
はしき山のたゝかは

朝夕に仰ぐ仰がじいかにとも不盡の高嶺を忘
れて思へや

をり〳〵に夢に入りつゝ神さぶる不盡の高嶺
のそのおもかげに

　　○浩々歌客と富士の裾野めぐり
　　せるとき

世の中に人はあれども
友ばかり親しきはなし
世の中に友はあれども
魂あへる友にしかめやも
たまあへるその友かきの
をさなきゆむつべる友と
天そゝる不二の高嶺の
麓邊をめくりて見むと
赤駒にしづくらをおき
しつ鞍に筆紙をそへ
うちよするするがの國の

大宮の御田に釀みけむ
美酒を添へのせもちて
ほがら／＼明け行く空に
くつはみをつらねてゆけば
野の花は蹄のほとり
いろ／＼に咲きにほひつゝ
鳴く蟲は草むらの中に
をり／＼にうたひさゝめき
神山は八重雲ちわき
よろこぼひゑがほつくろひ
わがともを迎へそもてなす

あはれ〳〵樂しき事も
世のさがのをかしきことも
うらなくかたらひつゝも
かくさはずかたらひつゝも
乘る駒にまかせて行けば
むらきものこゝろもはれぬ
憂きこともなくさみはてぬ
人の世のいつはりはいづく
世の人のそしりやいづら
なか〳〵に秋の山ぶみ
盡きずともよし

○同じときによめる歌ども

郭公聲ぞくゝもるたそがれの富士の裾野の雲の中みち

夕ぐるゝ不二の裾野の雲の中に鳴くねもさびし山ほとゝぎす

霧わたるをちの茅原はるかにもいばゆる駒のこゑぞきこゆる

雲五百重そらまき立ちて足引の山もとゞろにかみ鳴りわたる

たつかみに七くさの花にほはせてたどるか駒の山路暮れゆく

不二のねは雲にうもれて青海なす裾野茅原秋の風吹く

行くかたは雲もなびきて見はるかす大野の原に月ぞのぼれる

神の御前の巻

○

神の御前を拜みつゝ
おもへばたふと天地の
開け始めしむかしより
神をは祭るならはしは
天つ御神の御すゑなる
天皇命(すめらみこと)は天つかみ
國つ神をもまつります
今はいよ〳〵おごそかに

○
たくづぬのしらぎの國にうちかけし大和八十
綱今も朽ちせず

○天長節
年ごとにいはふこの日をとことはに千五百の
秋もいはひかさねむ

○
いざ吾兄言あげやめてなごやかに喜ぼひつつ
樂しきを經め

○
敷島のやまとの國は言擧せぬ國
たゆむつびにぎびて言あげせぬ國

○
皇神の國にうまるゝをのこらはすめら御國の
歌をよまなむ

○
足引の山里ほのに立ちのぼる煙の末も神やち
はゝむ

あさなゆふな仰ぐもうれしたまちはふ神のめ
ぐみを朝なゆふなに

皇神の國に生れて皇神を仰がざりせばかひや
なからむ

日の本の國に生れてうら安くあり經ることも
神のめぐみぞ

○石上神宮の本殿新しく成りて布留の神さ
びたる茂山に千木の光高く輝き出てたり

いそのかみ八重しみ立てる布留山の松のこす
ゑに千木ぞかゞやく

○大　祓

大君の御代きよらかに齋ひまつらむ
罪けがれ大はらへてふ神つ御わざに

○禊

御社の御前の海のしのゝめに禊をすれば月か
たぶきぬ

○

うち仰ぎ仰げばいとゞかしこしな遠き神世の神のみをしへ

八十寶何はありとも皇國はし神のをしへの道をこそ行かめ

○言靈を齋へ

言靈のさきはふ國ぞ皇國人その言たまをなほ齋はなむ

言の葉を疎になし思ひそ皇國の言の葉よりこそ國は榮ゆれ

ふたつなき御國體なる言の葉をおほろかにやは思ひ棄つべき

言の葉は國の命ぞいたづらに外つ國ぶりにならはざらなむ

外つ國はおのが言葉を飽くまでもおもみすといふをいつくしむといふを

皇國のおなじ御裔(みすゑ)の民にして神のみことばおもみせぬやなぞ

人の心いはむもおろか言の葉の道も日にけにくだち行く世を

うるはしき直き正しき皇國(すめらくに)の言の葉の道おとろへ行くも

くだち行く人の心にかなふとしいはゝこそあれあはれ言の葉

うるはしき大和言の葉かへり見ず外つ國ぶりにつくが悲しさ

外つ國のきつなはなれて皇國の言葉の道ぞいや榮えなむ

言の葉を外つ國ぶりにおもむけて國のゆくさき危くありけり

言の葉を重みせよ人あくまでも皇國のことばおもみせよ人

ひとつなる大和言葉の御國ぶりいよゝまもりておほろかにすな

言の葉の末とないひそ言の葉のひとつなれこそ國民はむつめ

皇國(すめくに)の言葉いつくしめと言擧する人のかくふみ眞幸くあらなむ

言靈の光や消えむ皇國(みくに)人(びと)皇國(みくに)のことばかへり見せすば

言靈の光し消えば皇國(すめくに)の國の行くさき何とかもせむ

言靈の光し消えば皇國の國のいにしへ何とかもせむ

言靈のそのみたまをし心して齋はゞ國はいよゝ榮えむ

○

臥す虎とおもひいる矢のひとすぢはいはほく
ろがねとほさゝらめや

○

清すみの山立ち昇る朝日子のかげうるはしく
心すまはむ

○進水式

すめらぎの國のみたから浮寶今日浮け添へつ
あはれ御たから

わたつみの神もめでます今日ならむみいくさ
ふねの船おろしゝて

○新潟縣加茂町なる養徳文庫をこ
とほぐとて

玉ぼたの道に光をさし添ふるこれの文庫(ふみや)は千
代に榮えむ

○米山愛子が學の業を卒へて母に
伴はれて西の京に旅せる由を聞
きてよろこひの心をよめる

吾が家の如くなつかひし
學の窓もいまはたゞ
百よろこびのうちにしも
をしき名殘を惜みつゝ

はまれの花をかざしもち
西のみやこの花見むと
彌生のそらに出で立ちし

君がさちこそめでたけれ

高尾とがのをあらし山
時には見かへるをちこちの
景色もわきてはゝそはの
樹のもとこそはたのしけれ

あはれのどけききのふけふ
喜さはに幸おほき
君が春こそとはならめ
君がさちこそとはならめ

○杉浦重剛大人の東宮御學問所御
用係を拜命したまへる由を昭憲
皇太后の大御はふりしも聞きて
遙に詠みてまゐらせたる

とこやみの悲しき空のをちかたに光ある世を
おもふ今日かな

○同じ大人の還暦の賀帝國大學植
物園にて催されたるに

敷島の大和の國に咲きみてる花もをりから君
をいはゝむ

○

老といはゞ老の名もよししかすがに千代も八
千代も君をちいませ

○

君が家は千代のさかえもかねて見むこの寶を
は今し得つれば

○

七十(なゝそぢ)は老とはいはじ高安の里の名負ひて千代
も經よ君

眞幸(まさき)くて君が越えつる七十(なゝそぢ)の坂は八千度君こえませよ

○

霞たち花さく春ののどやかに君はさかえて千代もまさなむ

○道路新に開けたる祝

玉ほこの道ある御代に玉ほこの道もいよ〱ひらけ行くらむ

○世に遇はで過せる友の久しく病みて身まかりけることを聞きて

このうちにわが世ふけつと友千鳥いまは悲しきねにや鳴きけむ

○住吉神社禰宜橋本ぬしをいたみてよめる

住の江の松の樹むらの幾千代と君がよはひをかけてしものを

相見てし昨日を思へば現ともいめともわかず悲しき今日か

○石川半山の父におくれて七日ばかりがほどにまた稚子をうしなひければとぶらふとて

人のおやの子としてえ堪へず悲しきをおやとしてさへ君をこそおもへ

おち君の御杖しろとしいでたゝす吾兒がよみちやさびしかるらむ

かなし子がゑまひそめたる面影を夢ならずして誰か見るらむ

○明治のそれの年の十月何のことのありとも知らで舊藩主の御館にまうでしに令夫人富岳院殿のかくれましつることうけたまはりて胸もつぶるゝこゝちして

うるはしきつねのみけしきたばらんとまうでしものをあはれきみはや

子爵三位公の御許にとぶらひ申し
て

千代八千代さきくといのるわが君にかねてけ
ふをは思ひかけきや

御うまごの君たちの女房どもにい
だかれたまへるを見奉りて

わか松のみどり色添ふみそのにも秋ふく風ぞ
かなしかりける

富岳院殿の御室ををがみ奉りて

くゆりみつ香の煙のおほろかにきみがうへを
ばおもはざりしを

夜御柩の御そはにはんべりて

さよなかとよるしふくればみひつぎの香のけ
ぶりもさえまさりつゝ

みまへにしかくてさもらふ夜ぞとはいつかは
たれかおもひかけてし

人々と共に御柩の御蓋しめて綾の
御布をかけ奉りて思ひつゝけゝる

みひつぎはあやぎぬかけつあやなくもつゝみ
かねたるわがなみだかな

みはふりの日みともには仕へまつらで御寺の門の内に受けもたる役つかへまつれるに物のねと共にしづ〳〵とみひつぎの通らせたまふををがみまつりて

みひつぎを拜みまつればまたさらに袖にしぐ
れのあめもそひつゝ

廿年がほど家扶つとめたりし翁の今年齡八十になれるが御位牌をさゝげもちてみともに立ちたるを見て

あづさゆみやそぢのおきなかちよりしみとも
つかふるけふぞかなしき

御葬のわざはてゝみひつぎの日暮里へむかはせたまふを見送りまつりて

立ちのぼるけぶりの末もこよひだにみたちのかたになびけとぞおもふ

ひとなぬかの御逮夜に御館にまゐ出でて

ひとよふたよ三夜もいつよもかりそめにたゞゆめとのみ過ぎにけるかな

○陸軍歩兵少尉村田精一ぬしはをしき益荒雄なり演習に出でゝ病あるをも顧みず任(ま)けの務にいそ

しみてつひにあつしくなりて長く帰らぬ旅路に出で立ちぬまことにをしき益荒雄なりけり

ものゝふの家に生れて野に山に苔むすかばねさもあらばあれ

○佐久間海軍大尉

をりしあれ水漬(みづ)くかばねを野におくるそのひつぎべに花も散りかふ

水底に沈くをぶねのいまはにも我が大君を忘れて思へや

水底も我が大君の食國ぞ水漬くますらを名さへ朽ちめや

○五月雨の頃友の母をうしなひたるをいたみてよみて贈れる

此の頃の雨をなみだと君ひとり神にあつめてねにや泣くらむ

○送別

立てし心のひとすぢは　ますらたけをが執る弓の
ひきて反らぬためしなり　ふみの林にわけ入りて
かたみに誓ひし言の葉を　思ひ出でゝは勵みてよ
燒鎌利鎌利心を　憂き世のこゞしき岩がねに
とぎて磨きてためさなむ　我等がさして行くかたの
つゞらをりなる道の邊は　うばらからたち茂れるを

○

櫻の花も誇らじな　富士の高ねも何かせむ

すめら御國の國民が　すめらみことを仰がずば

○送　別

かりがねの春のちぎりはしばしにて明日は花
さへさびしかるらむ

○

球を投げほりを飛びてもむつびつる友はこひ
しきものにぞありける

言たまの巻

○古事記を讀ませ

古の御手ぶり知るは何ふみと問はゞすゝめむ
ふることぶみを

すめらぎの大御をしへをまつぶさに觀るべき
ふみは此れの御ふみぞ

いにしへの千代のふる道まつぶさに蹈みわけ
行かむ書（ふみ）は此のふみ

斯のふみのなからましかばいそのかみふるき
御代をはいかで知らまし

いそのかみふる事ぶみを讀まずして神代のか
たちいかで知らまし

古の遠皇祖のおきてましゝ國の基を知るはこ
のふみ

いそのかみ古事記を讀みて後いよゝ仰がゆ國
の光は

いそのかみふることぶみは千歳經ていよゝた
ふとく光し添はる

言靈の幸ふ國のいにしへの國の姿を見るはこ
のふみ

そのかみの國の形を見るのみか言葉のあやも
にほふ御ふみぞ

外つ國の人にも見せばやいそのかみふること
ぶみのふるきあとをば

萬千秋長五百秋の葦原の瑞穗の國のむかし見
よ人

皇國の御てぶり知りて皇國の人は敎へよ皇國
の人

皇祖の大御訓を知らずして國つ御民と豈えあ
らめや

皇祖の大御手ぶりを知らずして國つ御民と豈
得あらめや

○

立てといへど子らは立ちてぞあゆみそむ來經
なむ世をは何と訓へむ

○伯父耕雨翁が故郷に歸るを送るとて

心せよ富士の高嶺の白雪のしらぬ旅路にあら
ぬものから

○友に逢ひて

茂りあふ庭の綠のこまやかに君とひと日をも

のがたりしつ

○

宵に照りて今日また曇る月かげを君にたぐへ
てをしとこそおもへ

○松浦伐柯の臺灣へ行くと聞きて詠み
ておくれる

袖にもたるつるぎの光つゝしみて行けやわが
友ますらをの友

○

波さわぐ戸田の港の朝風に君が行くへを思ひ
こそやれ

○

相模灘沖邊かすみて行く舟のほのかにだにも
見えぬ君かな

○

這ふ虫もいぶくさ霧もあだなれや身をば厭は

ねますらをの友

○

しばし君月も出づべし蔭しげる庭の一樹(ひとき)もまつといはずや

○

わきがたき袂わかちて吾が來れば門邊の松もとゞめがほなる

◎

立ちかへり友ぞこひしきむらきもの心相知る友ぞこひしき

○越路へ歸る人を送る

越の國はよそならぬ國親の國わが生(あ)れし國君が住む國

○夏の頃なにがしの君の箱根にゆあみしてましませるによみてたてまつれる

おばしまに立ちよる御袖すゞしくも世に似ぬ夏を君は占むらむ

おり立ちてむすぶ谷川おと清み御心さへも澄みわたるらむ

おもひやる心さへこそたゞならね函根の山はきみがいませば

をり／＼にゆきかふ雲もこゝろありてみやこの夏を立ちへだつらむ

立ちのぼる函根の山のしらくものおほゝしくのみきみをこそおもへ

○浩々歌客と舞子濱の某樓にて酒酌みかはして

おばしまに淡路島山はべらせて君とかたればたのしくありけり

○同じ樓にて海を隔てをちかたに見さくる泉州濱寺なる本山彦一大人の許に歌客と共にふみを贈るとてそのはしにかいつけたる大人は近頃高師の濱なる羽衣松といふがほとりに家を新に造りて住まへり

久方の天の羽衣得てしがな高師の濱の君を訪
ふべく

○

いかならむをりをばをりと心行くふみのこと
〳〵讀みかはてまし

○劒

のどやかに花を見るにもいにしへのやまとを
のこは太刀を佩きにき

○筆

そのつかを手握り持ちて文も歌もえかゝぬ罪
はたれにおほせむ

○

心から射る手はさえて梓弓石に立つ矢を奇し
とやは見む

○

身をかふるものにもがもな空蟬のからを見る

にも恥(やさ)しくありけり

○

ふみを讀み筆をとりて空蟬のうつしごゝろも
なき身なりけり

○

この世をは誰かうき世となげくらむ花も咲く
はや月も照るはや

○

葦原やしげれるおどろ苅りつくしてむ
久方の月の桂はよし折らずとも

○夢うつゝ

さめたりとわれは思へど
道理(ことわり)をおぼえぬ見れば
われはもねぶりてやある
ねぶれりとわれは思はねど
現(うつゝ)をば知らえぬ見れば
われはも夢か見てある
ねぶれらばさめてましもの

夢ならばさめてましもの
いめうつゝ中にさまよふ
わが身かなしも

短歌

まさやかに心のさぎりうちはらひうつゝにか
へれあはれうつそみ

夢をくふ獏といふもののありときくわがしこ夢
をはめなむものを

○

神習ひ習はましかばひとごゝろ世にわづらひ
はあらじとぞおもふ

○

青人草ならふ心をうち棄てゝ神のみわざに習
へとぞおもふ

○外國に留學せるをのこの心を

大方の心にあらで戀ふるかなわが日の本は皇
神の國

皇國風（みくにぶり）なほしおもほゆ天さかる知らぬ國邊の
學の窓に
外つ國の學のまどにこよひまた櫻花さく國邊（くにべ）
夢見つ

○目のわろきをのこのその一つを失ひ
たるに詠みて與へたるこれは親の手
にもてあましたるわかうどなり

つゝしめやそのひとつだにねもころにまもる
はやがて身をまもるなり

○劍を看る

ぬばたまの夜しふくれば
ふみの巻かたへにおきて
床の邊のつるぎをとりて
鞘はらひわがうち看れば
きらめきてたばしるひかり
かゞやきてたゞよふにほひ
風おこり虎かうそふく
雲わきて龍かもかけると
むぐらふのわがふせ庵に

物となくけはひ滿てれば
しまらくは物もわすれて
ながめつるかも

短歌

むすぼれし心もさえぬこのゆふべ取り看るた
ちの霜のひかりに

○

ふじの嶺のみねのひとかど旭たゞさし鳥が鳴
くあづまのみ空かゞやきわたる

○菖蒲の湯

伊豆の修善寺養氣館に在り源三位
頼政の夫人菖蒲前の浴せる湯なり
といふ

實さへむすばぬうもれ木の
うもれぬ花のおもかげを
うつしてとはに湧き出づる
いで湯のさまこそ奇(くす)しけれ

○開　墾

わき出づる山の井しめて吾妹兒と新墾すべく
庵むすびつ

わぎもこも出でゝ見よかし山の井の淸き眞淸
水月も澄みたり

○檜

わがおほぢが齋鉏とりて植ゑましゝ山の八つ峽
の檜原しげれり

○布　島

天つ御神の誰が御手に　つむぎて織りて機斷ちて
いかなる人に着よとてか　この布島はたゝみけむ

○

靜浦や夕波遠く月滿ちてぬのしまわたり風ぞ
すゞしき

○

天地も動かしつべきまごころの人の心ぞ心な
りける

○
眞心の心のちから人間はゝ火水もあらず鬼神
もあらず

○
わがもたる心のおくのひかりこそ神と佛と人
はいふらめ

○
あめ地のもとつ心にかへしてぞ人の心は淨く

ふとき

○
かりそめの心の緒ろのはつれより身のいたづ
きは結ぼほるらむ

○
よひ〳〵に心きよらに靜やかにいを寢(ね)る床(とこ)に
病あらめや

○某書伯に贈れる

あなおもしろの君が筆　春は咲く花うたふ鳥
秋は白露月のかげ　心のまゝに描き成して
あはれ貸せかし君が筆　君が筆をは手握りて
白雲かゝる大空に　畫やかき出でむ吾が胸の

○飯田充雄が小田原に病をつくろへるに
贈れる

さがむの小野にかすむなる
梅のにほひをとめ行きて
世の憂さ避くる吾が友は
やどるか此處の小田原に

空のどかなるあしたには
海原出づる朝日子の
影を磯邊にあふぎつゝ
東風に袖をや吹きかへす
雨しづかなるゆふべには
濤の音遠きともし火に
見ぬ世のさまをうつゝにと
千卷のふみや讀ますらむ
かひな延べなば玉くしげ